

アンテベラム期の無名作品の復刻

Philip Pendleton Kennedy, *The Blackwater Chronicle*

星野 勝利

アメリカ文学史の中に「驚異の年」(Annus Mirabilis)を探すとすれば、1850年代前半のどこかの年が選ばれる可能性がきわめて高い。エマソン『代表的人間』とホーソーン『緋文字』が刊行されたのが1850年、メルヴィルの『白鯨』とストウ夫人の『アンクル・トムの小屋』が1851年、ソローの『ウォールデン』が1854年、ホイットマンの『草の葉』初版とロングフェローの『ハイアワサの歌』が刊行されたのが1855年である。「アメリカン・ルネッサンス」ということばで把握されることの多い19世紀アメリカの文学的成果は、ほぼこの時期に集中している。

この中で特に可能性の高いものをあえて一つ選ぶとすれば、1851年がその最有力候補となるだろう。この年に出版されたメルヴィルの『白鯨』は、出版以来長い期間にわたり、余り注目される作品ではなかった。しかし、今日ではこの作品は、19世紀アメリカだけでなく、19世紀以降の世界文学を代表する作品の一つとみなされている。一方ストウ夫人は『アンクル・トムの小屋』で、奴隷社会に生きる黒人奴隷トムの悲劇を描いた。奴隷トムの悲惨な最期を描くこの悲劇は、読者のこころを強くとらえるものとなり、結果的に、南北戦争(1861-65)の一つの引き金になったという見方もされるほどである。

二つの作品の作者メルヴィルとストウ夫人は、この年、北米ニューイングランド地方で、それぞれ作家としての生活を送っている。メルヴィルはマサチューセッツ州西部バークシャー地方のピッツフィールドで、作品『白鯨』の執筆に取り組んでいた。この間、近所に住む先輩作家ホーソーンと親交を結ぶことになり、1851年の1月から夏にかけて、創作の悩み等についてしきりに手紙を書き送っている。一方、コネチカット州生まれのストウ夫人は、オハイオ州での長い生活の後、前年の1850年から再びニューイングランドの生活に戻っていた。この年、

「逃亡奴隷法」が議会を通過したが、この法律への怒りを込めて、1851年6月から翌年4月にかけて、奴隷制廃止論者たちの機関誌に『アンクル・トムの小屋』を発表している。

メルヴィルやストウ夫人のこのような姿から、1851年の北米アメリカ、とりわけニューイングランド地方の、文学的・文化的状況の一端を垣間見ることができる。しかし、この時期の北米の他の地域の状況、とりわけニューイングランド地方以外の

しかし、この時期の北米の他の地域の状況、とりわけニューイングラン地方以外の地の文学的あるいは文化的状況はどのようなものであったのか。一昨年(2002年)、約150年ぶりに復刻されたフィリップ・ペンドルトン(Philip Pendleton, 1808-1864)の『ブラックウォーター・クロニクル』(*The Blackwater Chronicle*, 1853)は、このような問いに多少とも答えてくれる。

ペンドルトンの名前はアメリカ文学史の中ではほとんど聞くことがない。ケンブリッジ版アメリカ文学作家案内をめくってみても、名前は見あたらない。それも無理はない。生前出版されたのはこの本一冊だけであり、出版当初は当時の作家ウィリアム・ギルモア・シムズなどから一定の評価を得たものの、次作が書かれることもなかったため、ほどなく話題にされなくなった作品である。ただし、文学史に名をとどめることと、作品が持つ価値の度合いが常に等価であるわけではない。少なくとも作品の持つ資料としての価値は、作品の持つ文学としての価値と同列に眺めることはできない。復刻版としての本書は、このことを改めて認識させてくれる。

本書は、一種の旅行記である。それも、ただの旅行記ではない。釣りを楽しむ中年男性グループの川釣り紀行である。対象となる場所は、アレゲニー山脈の西側、現在のウエスト・バージニア州を流れるチート川(*the Cheat river*)、すなわち首都ワシントンを経て大西洋に流れ込むポトマック川の支流である小さな川である。1851年の5月の末、川釣りを楽しむ中年男性5人の一行が、シェナンドー溪谷方面から3台の馬車に乗り込み、山道を走り、峠を越えて、この地を訪れる。この時の5日間の体験を語るのが本書である。

全14章211頁からなる本書で著者が語るのは、基本的に、同行者5人(後に案内役の猟師2人を加えて7人)による旅の次第である。この旅は、当初、単に釣りを楽しむための気ままな旅であった。新緑におおわれた初夏の山裾を進む気楽で快適な物見遊山の旅であった。しかし、宿の語らいの中で大きな釣果の期待できる場を目指すことにした一行は、地元の間人二人を土地案内人として、勇躍、上流の未踏の地に向かう。最終的に一行は所期の目的を達成する。辿り着いた上流の淵で、数百匹のマスを短時間で釣り上げる。この旅の楽しさ、苦しさ、そして野営の体験や命がけの帰還について語るのが、本書である。

この意味では本書は、アメリカ文学に特徴的な「ウィルダネス(未開の地/荒野)」に関わる書である。じっさい、作品中では、「ウィルダネス」ということばが、ことあるごとに姿を見せる。旅に出るのは、医者や画家や修道院長など、5人の中年男であるが、当時の知的社会を代表するかのような一行の日常的なことばのなかにも、この一端がうかがわれる。たとえば、一行が目指す上流の地(地名はCanaanとされる)は、“this land of Canaan was as perfect a wilderness as our continent contained”(60)

である。仲間うちでかわされる悪態のことばのなかにもこれは反映される。“Turn him out into the wilderness, and let him run with Ishmael and the other beasts!” (144)という具合である。いずれも「ウィルダネス」ということばが、当時の人々の意識の中で占めていた度合いの大きさを示唆してくれるものである。

ジャンルに関わるこのような特徴のほかに、本書には、さらにいくつか顕著な特徴がある。一つは、内容に見られる文学性、あるいは語りの文体に見られる修辭性である。旅の次第を語る本書の文体は、きわめて詩的である。文章に詩的なリズムが溢れているだけではない。地の文のなかに、あるいは対話の中に、ギリシャやローマの神話や歴史、あるいは古典の世界への言及が頻出し、さらに、引用された多くの詩句が、臨機応変、随所にちりばめられる。たとえば、遙か遠くに広がる美しい山々を眺めたときの様子は、次のように描写される。

Here a magnificent panorama of distant-blending valleys and mountains piled on mountains, breaks suddenly on our view; and seized with a shouting spirit of exultation—

“We call a halt, and make a stand,
And cry, 'St. George for merry England!' ”

meaning thereby this all hailed land of ours, which the patriotic reader will of course understand. (23)

あるいは、アメリカの山々の10月の紅葉の美しさを、イギリス人にだけは何としても自慢したしたいと思う語り手は、このことを次のように語る。

In connection with this part of the subject, I would like to take the cockneys a turn or two, upon the splendor of the foliage of October—the hues of all dyes—particularly the scarlet—

“The leaves that with one scarlet gleam,
Cover a hundred leagues and seem
To set the hills on fire.” (46)

引用される詩句は、自作のものと思われるものを除くと、チョーサー、バイロン、

上記引用にも見られるように、旅に出る5人の意識の中では、イギリスへの対抗意識が顕著である。これは植民地時代にイギリスが宗主国として果たしていた政治的、経済的影響力が、文化的な面では、独立後半世紀以上を経過した1851年のこの時代でも、一般的にはまだ作用していたことを示すものかもしれない。しかし、引用され、言及される詩句の多くが、ほかならないイギリスのものであるのは、皮肉である。

本書には、このほかにも、いくつかの特徴が見られる。同行者の一人である画家の手になるとされる挿し絵が随所に織り込まれていること（実際に旅をともにしたのは友人の画家 David Hunter Strother）、戯画的ユーモアが語りの中に溢れていることなどもその一つである。シャクナゲ、バルサムモミ、アメリカツガなどの森の植生や、そこに住むシカやクマのこと、川に生息する無数のマスのこと、そして支流を形成する無数の滝のことなど、アパラチア山系アレゲニー山脈西側地域一帯の動植物の生態や地理的特徴の情報が、さりげなく盛り込まれているのも大きな特徴である。未開の土地の売買やその活用についての話題が、一行の対話の中に盛り込まれているのも、当時の文化人の意識の在り方を教えてくれるものとして貴重である。

メルヴィルやストウ夫人の書物も1851年当時の北米アメリカ、すなわちアンデペラム期のアメリカ社会の文化的状況や人々の意識の在り方を教えてくれる。しかし、文学史的にはほとんど注目されることのなかったこのような作品も、当時の人々の関心のありかや社会や文化の在り方を確実に示唆してくれるものである。復刻版としての本書が教えてくれるのは、作品の持つこのような価値のことである。

(West Virginia University Press, 2002, 211pp.+xxxvi, \$27.50)

(岩手大学教育学部英語教育講座)